

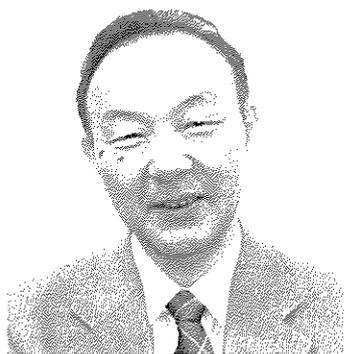
No. 5



2002.12

## (目次)

- 巻頭言  
教育学部の特徴を「分かりやすく」語ることの難しさ・・・ 研究科長・学部長 皇 紀夫 ..... 2
- 在外研究ノート  
「普請中国」..... 教育社会学講座 教授 竹内 洋 ..... 3
- 研究ノート  
教官から ..... 臨床教育学講座 教授 矢野智司 ..... 4  
院生から ..... 教育認知心理学講座D3・日本学術振興会特別研究員 林 創 ..... 4
- 事務室より  
教育学部にお世話になって ..... 会計掛 掛長 林 芳男 ..... 5
- 図書室より  
「図書を移動させました」..... 図書掛長 山本 修 ..... 5
- 臨床教育実践研究センターから ..... 心理臨床学講座 助教授 河合俊雄 ..... 6
- 留学生から ..... 博士課程1年 図書館情報学 金 智鉉 ..... 6
- 諸記録 ..... 7~8  
① 入試結果 ② 学位授与件数 ③ 人事異動 ④ 招へい外国人研究者の記録  
⑤ オープンキャンパス ⑥ 奨学寄附金受入 ⑦ 科学研究費補助金 ⑧ 民間との共同研究
- 諸報  
事務官紹介 ..... 8  
計 報 ..... 8



## 教育学部の特徴を「分かりやすく」 語ることの難しさ

教育学研究科長・教育学部長 皇 紀夫

去る8月8日と9日の両日京都大学のオープンキャンパスが開かれました。聞くところでは、本学はオープンキャンパスを開催した最後の大学であるとのことで、殿としての面目を施したわけです。これまではなぜ開催されなかったのか、その理由が奈辺にあったか知りませんが、最後まで無関心を装ったのはいかにも京大らしい、という印象を改めて持ちました。しかし、大学を取り巻く環境の変化はこうした京大のような「古典的」大学のスタイルの存続を困難にできており、法人化を目前にした大学にとって受験生向けのさまざまなサービス活動は、むしろ大学固有の仕事として積極的に意味付けられるのが現状で、この度の企画は、すでに大学の法人化が始まっていることを実感させられる機会でもありました。

教育学部では、広報委員会が中心になって企画・運営に取り組んでいただき（申し込み者171名、出席者139名）、夏休みの暑いさなか先生方事務職員の方のご協力を得て、初めての試みとしてはかなり成果を挙げたと思えました。特に、東山教授の模擬授業は大変好評で、授業後の質疑は活発で鋭い質問も出され、受験生の関心の高さをうかがわせました。ご協力いただいた関係者の方々に紙面をかりてお礼申し上げます。

この席上、私も学部長として挨拶をしました。教育学部の特徴を受験生に分かりやすくかつ簡潔に話せということ、どのような話をしたか記憶に定かではありませんが、少し苦心したことは確かです。最近、「京都大学の教育学研究科・学部の特徴は何か、分かりやすく簡潔に述べよ。」という設問に答えなければならない場面が多くなったようで、受験生対象のものだけでなく、中期目標・中期計画のなかで

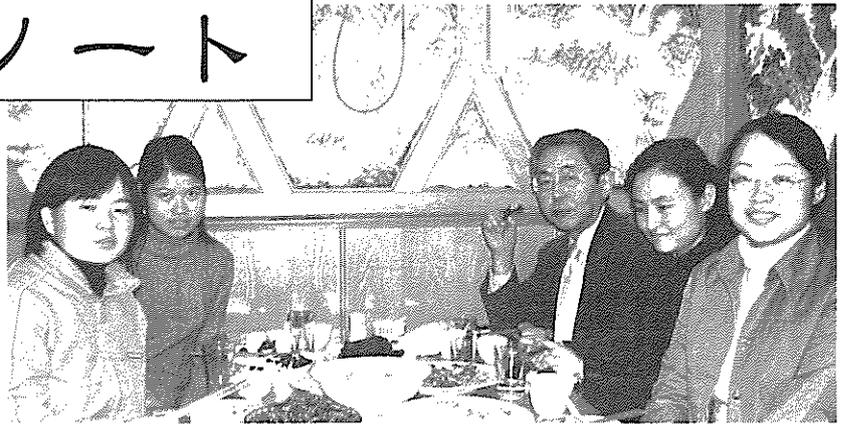
研究科の将来像に関する文を書く際にも、再三回答を求められたテーマでした。この傾向は、研究科レベルだけでなく大学全体においても認められ、京都大学の理念や将来像などを簡潔に表現する「京都大学の基本理念」（前文と8項目からなる簡潔な文言）或いは「京都大学の将来像検討WG（案）」（検討中）などとしてすでに一部が文章化され、この理念や将来像は、今夏の全学教育シンポジウムにおいても話題となり、活用される場面が増えているとの印象を受けました。

大学の教育や研究活動をイラスト入りの簡潔な文言で分かりやすく表わすことは、今日の社会的要請のひとつとして理解できるとしても、しかし、このような到達目標や将来像をかかげて計画的に研究や教育に取り組むという「分かりやすい」発想と思考や行動の仕組みでもって大学の役割を明らかにすることができるかどうか、私には疑問です。「分かりやすく簡潔に」述べられた大学像は、大学の脱神話を図ることですが、しかしその目論見は取りもたず「分かりやすさ」で偽装された大学神話を新しく作り上げることでもあり、大学は、その語り方において自墮落的であり内容においていかがわしいという批判を免れるものではないと思います。この種の発想に馴染まず、その動向を適当にあしらって迎合することなく、複雑で「分かりにくい」言説が深く根付いた大学であって欲しい、とひそかに願っています。

# 在外研究ノート

「普請中国家」

教育社会学講座 教授  
竹内 洋



わたしは、9月2日から来年1月10日まで、北京日本学研究センターで大学院の講義と演習を担当するために北京に滞在しています。北京日本学研究センターについては、すでにニュース・レター（第一号）で辻本雅史教授によって詳しく紹介されているので、そちらを参照して下さい。ここでは、まだ1ヶ月ほどの体験ですが、私の中国社会の印象を書いてみたいとおもいます。

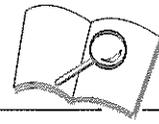
最初に北京市内で感じたことは、埃っぽいことでした。北京はほとんど雨が降らなく、乾燥していることでもあります。街のあちこちが工事中であることも多分に影響しているようにおもえます。わたしが住んでいるアパートの前では、ホテルの改築工事が、うしろは北京理工大学の建物の工事がおこなわれています。工事というのがまたすごい。いまの日本ではかんがえられないほど、大量の人間が交代制で、昼夜をわかず働いています。ですから、またたく間に街の景観が変わります。こんな風景をみていると、わたしのよう（？）年齢の者には既視感がぬぐえません。そう、60年代末あるいは70年代はじめての高度成長時代の日本です。経済的な豊かさへむけての人々の希望と活力にみながった時代だったことも現在の中国とよくにております。

実際、いまの中国の経済成長はすごいものがあります。最近発表された統計によると、今年度上半期のGDPは7.8%の成長率です。それにもなって産業構造や人口も大きな流動性を示しています。第1次産業従事者は78年には70.5%も占めたのですが、いまや50.1%に下がっています。第3次産業従事者は、12.2%（78年）から27.7%に急増しています。高等教育進学率も13%で、急増中です。いまの中国は、まさに日本のあの高度成長時代をなぞっています。

しかし、日本の高度成長時代は、貧富や地域格差を平準化する方向で展開しました。高度成長による結果としての社会主義化です。このところが現在の中国の高度成長とちがうようです。都市と農村の所得格差が大きく開きつつあるだけでなく、貧富の差も大きくなっています。北京や上海など8つの大都市の家庭の資産調査によると、上位10%の家庭が全資産の45%を保有し、下位10%ではわずか1.4%の保有でしかありません。日本と比べて広大な国土と人口、そして突然かつ急速な市場化の中では、どうしても大きな地域格差が残り、富める者と貧しい者との格差が狭状に開いてしまうのかもしれませんが。中国では、高度成長の結果、社会主義国での不平等問題、階層問題というイデオロギーと背馳するあらたな社会問題が浮上していることは否めません。日本では、このところ所得の不平等化や学力の階層差が社会的論争の種になっているようですが、格差を誘因にした競争による活力でパイの拡大を狙っているかにみえる最近の中国社会を合わせ鏡にしたら、どう評価できるのだろうかともおもえてきます。

古くから中国を愛している日本人のなかには、最近の物質主義的で競争主義的な中国人気質の変化をさびしがっている人もいますが、どのような社会も一度はこうした豊かさへの志向を通過しなければならないはずで、問題は、中国がこの高度成長時代を通りぬけ、豊かさを経験したあとで、どのような社会になっていくかでしょう。

われわれの社会では、あの高度成長のあとには、夢から覚めたあとの倦怠と無目標がただよいはじめました。中国が高度成長のあとに、日本モデルをたどるのか、それとも独自の中国モデルを提示できるのか、興味深いと同時に、われわれも中国社会の行く末を横目でみながら、日本社会のあるべき姿を考えたいもので



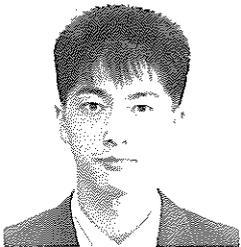
臨床教育学講座 教授  
矢野 智司

私は、これまで、子どもと大人との関わりのなかで、両者がどのように意味を生成させていくかということに関心を持ってきました。このような関心から、最近『動物絵本をめぐる冒険—動物・人間学のレッスン』というタイトルの本を勁草書房から出しました。その中で次のようなことを考えてみました。

幼児にとって動物絵本を読んでもらうことは、その絵本の一冊一冊において、未知の世界に身を躍らす冒険そのものです。幼児はこの動物絵本の世界で、人間と似ているが人間ではない「他者」ともいべき動物に出会い、場合によっては動物となり、動物と人間とが太古にもっていた絆を新たに結び結びます。それと同時に、幼児は動物と人間との違いを学

び、動物絵本の主人公がそうであるように、動物の生きる野生の世界から人間の生きるこの世界へと帰還します。幼児は動物絵本というメディアを通して、動物と人間との関係を学び、つまりは人間とは何かを学んでいるのです。その意味でいえば、動物絵本とは、幼児がこの世界ではじめて出会う人間学のテキストだといってよいでしょう。このように幼児の動物絵本をめぐる冒険とは深い知の冒険でもあるのです。

このように書きますと、楽しいだけのお話のようですが、人間と動物との関係の問題は、ブタやイヌと名付け他者を非人間におとしめる差別の問題・野蠻と文明にかかわる植民地問題・野生児の問題・動物性を否定し馴致する近代教育学の問題、さらには殺し食べることの問題といった今日の暴力とかかわる問題群とつながっていきます。動物絵本にはこの問題群とつながるテーマが様々な形で表現されています。人間と動物との関係の問題は、人間中心主義の次の時代の教育を考えると、避けることのできない主題なのです。



教育認知心理学講座 D3  
・日本学術振興会特別研究員  
林 創

私は、2つのテーマを基盤に研究を進めています。第1は、再帰的な事象に対する人間の認識に着目した研究です。

たとえば、犯人と間違えられた男が真犯人を追いかける『逃走迷路』（ヒッチコック監督）という映画があります。男は保安官に手錠をかけられますが、隙を見て逃げ出します。そして、ある家にたどり着くと、その家主が盲目であることを知ります。その後、家主の姪が帰ってきて、いっしょに食事をとろうとしますが、とうとう姪が手錠に気づいてしまいます。そのとき、「今ごろ手錠に気づいたのか？」と家主が言うので、男が驚いて振り返るという場面があります。ここでは、「男は『家主は<男が手錠をはめられている>ことを知らない』と思っていた」が、実は「家主は<男が手錠をはめられている>ことを知っていた」というように、「男の心的状態の

中での『家主の心的状態』と実際の「家主の心的状態」にズレがあります。

我々は、こうした入れ子構造を持つ「再帰的な心的状態」を理解することで、誰が何をどこまで知っているのかがわかり、映画や小説などを楽しむことができるのです。このような理解は日常場面でも重要です。これまで実施した研究から、再帰的な心的状態の理解が児童期の重要な発達課題であり、高度なコミュニケーションが成立する基盤のひとつであることが明確になってきました。今後は、その本質をさらに探りたいと思っています。

第2は、情報リテラシー教育の最適化に関するもので、子安増生先生や本学外の先生方と共同で実施させていただいている研究です。私は、本学1回生配当科目「情報学」のTAを担当させていただいており、私たちはこの授業で質問紙調査等を行うことで、履修者の知識やスキルの向上を検討しています。履修者が上達していくのを見ると、私もうれしくなります。

こうした研究を実施していく上で教育認知心理学講座はたいへん恵まれた環境だと思います。このような場で研究ができることを、私は幸せに感じています。

## 教育学部にお世話になって

平成14年4月1日に教育学部にお世話になって早7ヶ月が過ぎました。

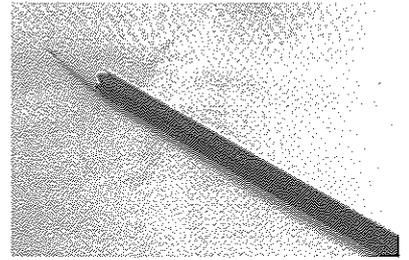
この間会計担当として、平成15年度概算要求、平成14年度歳出予算の部内配分、学長裁量経費等の特別事項の要求等を行って参りました。

各教官の皆様も大学（国立大学）の構造改革の方針に基づいて、第三者評価に基づく競争原理により、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりのための「21世紀COEプログラム」の応募、国立大学等の独立行政法人化に向けた「第1期 中期目標・中期計画」の策定等多忙な前半期でした。

後1年半（平成16年度より）で独立行政法人として発足することとなり、事務部としても国の行政機関として今までに経験のない独立法人化に向けた多種多様な事務をやりこなさなければなりません。会計としても平成15年度には、現在の会計法に基づく会計処理を行うと同時に、独立行政法の会計として、独立行政法人の財政状態及び運営状況に関するすべての取引及び事象について、複式簿記により体系的に記録し、正確な会計帳簿の作成を行わなければなりません。そのために昨年度より簿記の



会計掛 掛長  
林 芳男



## 事務室より

研修（2時間／1日、15日間）が計画され3級の商業簿記の勉強に多数の職員が取り組んできた。今後は工業簿記を含む2級の簿記の研修（2時間／1日、31日間）が10月より計画されている。このように正規の簿記以外にも会計経理の事務は膨大であり、文部科学省における国立大学法人会計基準等がまだ示されていないので、今後の会計事務の内容が見えてこないため不安感はぬぐいきれないが、これから文部科学省においては会計基準が決定され発表されるであろうが、どこまで出きるかはわかりませんがすこしづつでも理解できるよう努力し万全を期したいと考えておりますので、各教官の皆様もご協力のほどお願い申し上げます。

## 「図書を移動させました」

教育学部の所蔵図書は14万冊をこえ、地階書庫内の狭溢度はさらにも増して、新着図書の収納に事欠く書架もできてきました。そこで図書室では昨年夏に引き続き図書の移動を行い、若干のスペースを確保しました。

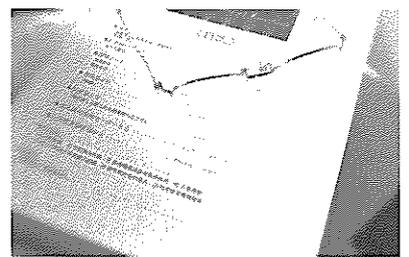
今回は、地階開架式書庫から別室閉架式書庫へ、第3類（社会科学）のうちの第1綱（政治）と第2綱（法律）を移動させるとともに、参考図書群、第4類（自然科学）、第5類（技術・工学）と第9類（文学）のうちの児童書の部分を別室閉架式書庫内で移動させました。この閉架式書庫へは、本学部教職員および大学院生以外は入庫できませんので、利用につきましては、閲覧室カウンターでお申し込みのうえ、しばらくお待ち下さい。

そして、第7類（芸術・美術）、第8類（言語）、第9類（文学）のうちの児童書を除く部分を地階開架式書庫から別棟閉架式書庫へ、また第6類（産業）、および博士論文、修士論文、卒業論文、教育課程文庫を、別室閉架式書庫から別棟閉架式書庫へ、それぞれ移動させました。この別棟閉架式書庫には、すでに高橋文庫、小西文庫、フランス教育史コレクション、および教育学部創設時に



図書掛長  
山本 修

## 図書室より



文学部から移管された図書が収納されていますが、入庫は本学部教職員だけに制限されていますので、利用につきましては、閲覧室カウンターへお申し込みください。翌開室日の13時以降にご利用いただけます。

そのほか、製本雑誌・紀要類も開架式書庫内で少し移動させ、別室閉架式書庫に収納されていた私学の紀要類を、地階開架式書庫へ移動させました。

これらの事につきまして、詳しくはカウンターでおたずねください。

閉架式書庫に収納された図書につきましては、利用者の方々にご不便をおかけする事になりますが、ご理解いただきますよう、お願いいたします。

## 臨床教育実践研究センターから



▲写真:客員教授(Wolfgang Giegerich)の公開講座、通訳は筆者

心理臨床学講座 助教授  
河合俊雄

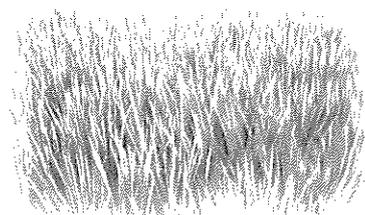
臨床教育実践研究センターは、専任以外に多くの兼任教官や客員教授・助教授から成り立っている。このような有機的なつながりがあるのは、センターが機能していると言え、筆者も心理臨床学講座に属しつつ、センターの兼任教官となっている。

センターの客員のなかで、外国人客員教授というものが毎年3ヶ月以上に渡って招聘されてきており、現在はドイツのユング派分析家であるWolfgang Giegerich博士がそれにあたっている。外国の一流の

臨床家・理論家によるセミナーが行われたり、意見を交換したりできるのは非常にありがたいことではあるけれども、京都大学に来てもらえる人を探し出して交渉し、また事務との間で様々な折衝を行い、果ては滞在中の授業(通訳)、生活のサポートをするのはなかなかの仕事である。助手の人と協力しつつ、これまではもっぱら筆者がこの仕事をやってきた気がする。

外国人客員に関係しているうちに感じた問題がいくつかある。まずユングが大学から撤退した伝統を引いているせいか、分析的な立場、特にユング心理学で海外の大学で活躍している人が少ないのである。日本においても、臨床心理学の学問性ということを今後も考えていく必要がある。大学にいないで、治療者として個人開業をしている人は、クライアントを持っている関係上、長期に渡って呼びにくい。また大学にいない人に関しては、常に「所属」が問題になる日本の事務からすると、様々な困難が付きまとい、その点では助手の人が苦勞してきたと思う。さらには京都での滞在を考えると、海外での大学と比べて、居住施設など、様々な点で遅れていることを痛感させられる。最後にだが、日本でのセミナーは、通訳が必要なのが現状で、院生の英語力の向上が待たれるところである。

## 留学生から



博士課程1年 図書館情報学  
金 智鉉

### 「国際賞を受賞して」

今年の7月、私の修士論文が京都大学教育学部同窓会の国際賞を受賞しました。この賞のおかげで、私は初めて自分の研究を他人に認めてもらい、研究への自信も出てきました。

私は韓国の大学で図書館情報学を専攻するとともに、特に視覚障害者へのサービスに関心を抱き、ボランティアとして視覚障害者とも実際に交わってきました。日本で勉強を続けようと思い、京都大学を希望しました。そして1年間の研究生を経験し、修士課程に入学しました。

修士課程でも、韓国の図書館における視覚障害者サービスを研究しましたが、図書館サービスの基

礎となる統計や数値さえ定かでないという現状がありました。また先行研究を調べましたが、焦点の定まらない総花的な調査が大部分で、しかも調査自体がインターネット以前の時代になされたため、現状および将来に展望を抱かせる内容ではなくなっていました。そこでインターネットを調査項目に組み込むとともに、視覚障害者によるサービスの利用という観点にしばって調査を実施しました。

アンケート調査がすべてうまくいったとはとても申せません。しかし、修士論文で韓国の視覚障害者への図書館サービスの現状と課題は、ある程度、解明できたのではないかと考えています。と同時に、私にとってこの論文は、今後の研究を伸ばすための起点と位置づけることができ、その意味でも国際賞をいただいたことに感激しています。

これまで世の中で役に立つ人になりたいとの一心で研究を進めてきましたし、今後も続けるつもりです。私がこうした研究を行う目的は、視覚障害者が一般人に最も近いレベルで情報にアクセスできるようにすることです。そのために、視覚障害者に関わる様々な環境や物事について、もっと深く考えていきたいと思っています。

# 諸記録

## ◆平成15年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	40				
後期日程	20				
第3年次編入学	10	69	68	10	

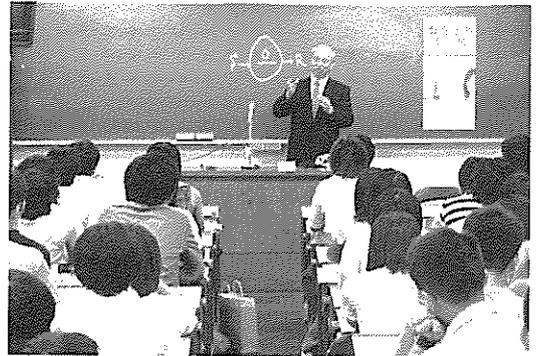
・教育学研究科

課程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース 教育科学専攻	18				
	臨床教育学専攻	14				
課程	教育科学専攻(専修コース)	10	40	40	11	
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名				
博士後期課程編入学		若干名				

## ◆平成14年度学位授与件数 (H14.10.1現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	0
	論文博士	0

## ◆オープンキャンパス2002開催



(模擬授業のようす)

## ◆平成14年8月31日付人事

竹村 心 図書掛員 辞職

## ◆平成14年9月30日付人事

徳岡 秀雄 教授 辞職

## ◆平成14年10月1日付人事

藤井 芳克 専門職員 文学部第二教務掛へ配置換  
 藤岡 正雄 専門職員 医学部教務掛より配置換  
 吉松 伸恵 図書掛員 九州大学附属図書館六本松分館より転任

14年8月8日(木)～8月9日(金)の間、「受験生のための京都大学オープンキャンパス2002」が開催された。本学部は、8月8日(木)午後から実施し、約140名の参加者があった。

当日は、皇学部長の歓迎の挨拶、東山教授の模擬授業、教官との意見交換があり、参加者の評判も上々であった。また、工学部8号館においては、鈴木助教授、齊藤助教授、稲垣助教授(広報委員会委員)及び在学生によるフリー相談が行われ、多数の参加者があった。

## ◆招へい外国人研究者の記録

外国人研究員

ギーゲリッヒ ウォルフガング  
 Giegerich Wolfgang  
 現職 ユング派精神分析家(開業)  
 受入講座 附属臨床教育実践研究センター  
 臨床心理実践学  
 受入期間 14. 9. 27 ~ 14. 12. 27

外国人共同研究者

パティープ メタクナブディ  
 Pateep Methakunavudhi  
 現職 チュラロンコン大学教育学部  
 高等教育学科 助教授  
 活動内容 情報技術セキュリティ問題に関する倫理的事項の日タイ比較研究  
 比較教育政策学講座  
 受入講座 高見 茂 教授  
 受入期間 14. 7. 1 ~ 14. 11. 30

## ◆奨学寄附金受入

寄附金の名称	寄附目的	寄附者	研究担当者
教育認知心理学研究助成金	子安増生教授の研究に対する研究助成	三洋 HRS 株式会社	子安増生

## ◆科学研究費補助金(追加交付)

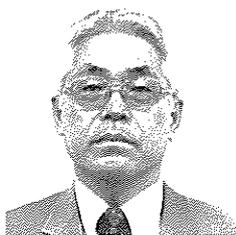
研究種目	研究題目	研究担当者
14年度 基盤C	スクールリーダー(教育行政官・学校管理者)再教育カリキュラム開発の総合的研究	皇 紀夫

## ◆民間との共同研究

民間機関等	研究題目	研究代表者
株式会社野村総合研究所	三次元仮想空間における表情アバターの開発研究	楠見 孝

# 諸報

## ◆新任教官・事務官・事務補佐員紹介(「」内は本人の抱負)



藤岡正雄 専門職員

平成14年10月1日付け採用  
「昭和54年11月に初めて教育学部に来て以来2度目になります。介護等体験など大きな変化に驚いています。」



吉松伸恵 図書掛員  
所属掛: 図書掛

平成14年10月1日付け採用  
「右も左もわからない新参者ですが、精一杯努力をするつもりですので、どうぞよろしくお願いします。」

## 訃報



梅本 強夫(京都大学名誉教授)

梅本強夫先生は、9月13日逝去された。享年80歳。昭和23年京大文学部卒、教育学部講師、助教授を経て昭和45年教授(教育心理学)。昭和60年停年退官。記憶研究と音楽心理学において優れた研究業績を残された。

## 編集後記

「ニューズレター第5号」をお届けします。これまでと同様に、多くの方々に突然執筆を依頼させていただきましたが、こころよくお引き受けいただきました。心から感謝申し上げます。

4月から出発した新しい広報委員会は、熟練委員長を中心に活動しております。委員長はニューズレターのマンネリ化を危惧しておられますが、今回は新しい企画といたしまして「留学生から」というコーナーを設けました。毎回同じ構成で発行いたしますと、これまでに執筆された方にも何度も繰り返し執筆をお願いしなければなりません。できるだけ多くの方にご執筆いただくという趣旨から、ささやかな変化を試みたいです。他にも何か新しい企画等がございましたら、編集委員までお気軽にお知らせください。

今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。  
(S.S.記)

## 京都大学教育学研究科

・教育学部広報委員会(平成14年4月~)

委員長 高見 茂 教授  
(比較教育政策学講座)

委員 皇 紀夫 教授  
(教育学研究科長・学部長)

委員 鈴木 晶子 助教授  
(教育学講座)

委員 齊藤 智 助教授  
(教育認知心理学講座)

委員 宮谷 浩 事務長

委員 眞継 芳春 庶務掛長

委員 寺川 秀世 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部庶務掛

TEL 075(753)3003

表紙デザイン 山田旬子